（第 162 回）神奈川研究会議事メモ

<table>
<tr><td>開催日</td><td>2025 年 2 月 11（火）</td><td rowspan="3">出席者
敬称略</td><td rowspan="3">西村二郎・大谷宏・山崎博・持田典秋・宮本公明・神田稔久</td></tr>
<tr><td>時間</td><td>15 時～17 時</td></tr>
<tr><td>場所</td><td>リモート方式</td></tr>
<tr><td>技術課題</td><td colspan="3">「米欧回覧実記」に見る新技術への関心（神田）</td></tr>
<tr><td>内容</td><td colspan="3">日本における新しいものへの関心と導入の歴史
ー技術を移植し創造性を得る歴史ー
Ⅰ　前史
1. 江戸時代までの海外への関心と新しいものの導入
２. 江戸時代における海外への関心と交流
Ⅱ　明治維新と岩倉使節団
１. 岩倉使節団
２, 米欧回覧実記
Ⅲ　後進国日本の研究開発（概説）
Ⅳ　失われた 30 年とこれから（主張）</td></tr>
<tr><td>発表者からのコメント</td><td colspan="3">・“失われた 30 年”と言われてから久しいが、その原因も解決策も見い出せない中で時間が過ぎている。
・その解決の糸口を探る目的で、温故知新に擬えて日本における新しいものへの関心と導入の歴史を概観してみた。
・日本は極東と言う僻地でかつ大陸とは海で隔てられているにも関わらず、技術を移植してきた歴史は古く、それは遠く弥生時代の米作から現在まで連綿として続いてきた。
・その中で、明治以降の日本の飛躍的発展の礎を築いたと言っても良い岩倉使節団とその報告書「米欧回覧実記」に注目し紹介してみた。
・使節団は米欧 12 か国を回覧し、その結論として当時のプロイセンに注目し、日本もこれに倣って政治経済を変えて富国強兵の道へ進むことを提唱した。
・第二次大戦による蹉跌があったものの、日本は 1979 年には、Japan as number one と言われるまでに発展したが、その後“失われた 30 年”の泥沼に入り込んでしまった。
・“失われた 30 年”から抜け出す道は一つではないと思うが、今一度、岩倉使節団の志や心意気にふれて原点に戻って考えて見ることが必要ではないであろうか？
・そして同時に、技術を移植し創造性を得て来た日本の強みを保ち続け発展させることを忘れてはならないと思う。</td></tr>
</table>

会員からのコメント	（西村） ＊分かっているようで分かっていないのが「失われた 30 年」である。そもそも日本に失うものがあったのかどうか、それすら疑わしい。 ＊明治維新、長い間の鎖国を解き、西欧諸国の先進的文明に接した日本の為政者の驚きは察して余りある。彼らは純粋に、社会的諸制度を含め、先進国の進んだ科学技術に学ぼうとしたに違いない。そうした事情があるのだから「米欧回覧実記」に立ち返って、考えてみようとする態度は神田さんの慧眼である。 ＊さて、自分がもしあのときの視察団の一員だったとしたら、帰国後どう振る舞っていただろうか？　やはり、追い付くことを最優先にしたに違いない。そもそも、日本という国は開闢以来、文明は海外から取り入れてきた。文字然り。仏教も伝来してきたのである。古くは、鉄器とか火薬もそう・・・鉄砲もそうだった。 ＊といって、日本人が資質において劣っていたのではない。新しいものを創生しようとする文化がなかったのである。 ＊とは言え、新しい科学技術を学んでいるうちに、遅ればせながら、自らも新しいものを創出する努力をするようになり、実を結び始めたことも事実であろう。 ＊これを、ぶち壊したのが、学界の民主化（悪平等化）であると私は思っている。2000 年を挟んで日本の「研究力」が落ちたと言われるようになったのも、そのせいだ！ ＊学界も政治力がものいうようになり、学力のない研究者が学界にのさばるようになってきた。私は出身地の宍道湖の水質・水産行政を一時期支配した東大教授（女性）のお粗末な研究を知っている。国交省、島根県の官僚、島根大学（汽水湖研究センター）の主流派教授も盲従していた。これは象徴的な出来事に過ぎない。 ＊独創的な研究テーマは研究力のない（政治力はある）研究者には理解されない。難しいが、この問題を打破しなければ、日本が科学技術で先進国入りすることはあり得ない。 ＊「失われた 30 年」においても、日本には、DRAM の他、テープレコーダー、トランジスターTV などヒット商品もあるが、日本発のイノベーションに基づくものではない。 ＊日本の企業は収益力がない（→GDP）ので、研究投資も少額！⇒ジリ貧。 （大谷　宏） ＊「日本の失われた30年から抜け出すためには、明治維新の岩倉使節団のはたした役割やその精神を思い起こせ」との神田さんの主張は、斬新且つまことに尤もで的を得た指摘であると思う。 ＊確かに、岩倉使節団は、欧米諸国の政治経済から文化、産業基盤にいたる諸状況を丹念に見学し、調べ、現地当局者との意見交換をも、行った上で、近代技術の基盤の上に構築すべき新生日本の在り方の中に欧米先進諸国の在り方をどう取り入れるべきか、或いは、取り入れるべきではないかについて実に適切な評価・判断を下している点で驚かされる。 ＊翻って、現在の日本の状況を考えてみる。日本は失われた30年と言われて久しいが、日本人全体としては、深刻な危機感を懐いている人は決して多くないように見える。下手をすると、このままずるずると「失われた40年」にも陥りかねないどころか、人口激減の中で「日本国消滅の危機すらあり得る」と憂慮する。 ＊今こそ、明治維新期における岩倉調査団が果たした役割に匹敵する新しい日本の再建構想が必要である。 ＊私は、今、米国で猛威を振るっているトランプ革命の中でイーロン・マスクが率いるDOGE（連邦政府効率化省）が大きな役割を果たそうとしている状況に注目している。 ＊日本でも、早急に日本版 DOGE を設立し、肥大化し効率が悪くなって革新的な仕事をしなくなってしまった省庁を再編し大改革すべき時ではないかと考える。現在の文科省などはいらない。代わりに科学技術省を設立すべきである。同様に環境省を廃止しエネルギー省を新設すべきである。又、悪名高き財務省等の大改革をすべきは当然である。

会員からのコメント	（持田典秋） 　我が国は、外国などから技術を取り入れる力は優れていると思う。鉄砲が種子島にもたらされて、翌年の来訪の際、宣教師たちは大儲けしようと沢山の鉄砲を持ち込んだら、すでに日本では多くの鉄砲が出回っていたという話がある。それは技術的に素地ができていて、その応用範囲だったのだろう。 　日本人に全く独創性が欠けているわけではない。それは今までのノーベル賞受賞者の数を見れば理解できる。ただ最近は、国の研究開発費の削減により、大学や国立研究機関の独創性を発揮できる場が失われているのだと思う。研究開発費が、韓国にさえ抜かれたいるとは、全く恐ろしさを感じる。 　やたらプライドだけが高く、海外に金をばらまいている政府に、大昔の夢が覚めない日産自動車の体たらくに類似性を感じるのは、私だけだろうか。 （山﨑　博） 「米欧回覧実記」は岩倉具視を団長として、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、山口尚芳が副使として明治の錚々たるリーダー達が明治４（1871）年から１年９ヶ月にわたり米殴各国の近代的社会制度、産業技術などを視察、吸収し、日本の近代化をどのように進めるべきかを記載した一大ルポルタージュで、維新のリーダー達の意気込みが強く感じられる。 原本は明治１１年に５冊組み全百巻として刊行されたが、現代語縮約版が角川ソフィア文庫から出版されており、折角の機会なので、こちらを読んでみた。当時の欧米の目新しい風物の多くの記述に加え、マンチェスターやリヴァプールなどを始めとして工業生産を詳しく観察し意見を述べている。また辺鄙な地まで脚を伸ばし、田舎では農業や牧畜、市場では交易の様子を視察し学ぶべき点を記述している。現代語縮約版の文庫本にも、108 点の綺麗な銅版画が収録されており、150 年前の欧米諸国の現地の様子が絵でよく理解できる。 　目を転じて、失われた 30 年の問題であるが、2023 年度末の企業の「内部留保」は、前年度比 8.3%増となる 600 兆 9857 億円だったことが明らかになった。内部留保がこの 10 年で倍増し、初めて 600 兆円を超える。2023 年度の日本企業の売上高は約 662 兆円であるから、年間の売上高に匹敵する内部留保を積み上げていることになる。 内部留保は、新しい事業への先行投資に当てるべきでる。つまり、研究開発や他によい投資機会が存在するにも関わらず過大な内部留保を確保してしまうことで、そこで得られたはずの収益を失った「機会損失」の状態となりかねない。インフレーションや円安の環境下では、内部留保が持つ相対的な貨幣価値が減少することさえ起こり得うる。 現在のトランプ政権下で、新日鐵による US スチールの買収が今後どのように展開するか注目される。また、日本はデジタル赤字が年々積み上がっており、さらに生成 AI がビジネス分野に浸透し始めると、企業はこれをどう利用し対処するべきかが早急に問われることになろう。 （宮本　公明） ・日本語の「学ぶ」は「まねぶ＝真似する」からきているのに対し、英語の”education”は元々“引き出す”からきているので、本来、日本での教育は、真似をすることからはじまったと聞いたことがある。 ・そういう意味で、見様見真似は、われわれの潜在意識に刷り込まれているのではないかと思う。そうであれば、この特徴を活かしていくことは他国の人にない強みになるのではと考える。 ・そんな考えで、「米欧回覧実記」の解説を聞いていると幕末～明治初期の人たちが示した行動は究極の見様見真似ではなかったかと思える。感心したのは、写真がまだポータブルでなかったこの頃、風景、機械、社会をイメージで伝えるために、多くの銅版画が添付されていることである。百聞は一見にしかずというが、これらの図版を見た人たちは、西洋の進歩がはるかに日本の想像を超えていると感じたに違いない。

会員からのコメント	・情報化の進んだ現代において、我々は技術の進歩を写真や動画で簡単に知ることができるようになったが、他国の進歩をみてなんとか食らいつこうという気概を失っているように映る。例を挙げれば、超高精細半導体生産技術のように周回遅れと揶揄される状況はあちこちにある。 ・この原因はいろいろであろうが、ひとへの投資を怠ってきたためと思える。優れた能力を持つ人を発掘してそれを中心に物的・人的投資を行うとか人件費はコストではなく優れた性能開発の源泉ととらえるとか、現在の経営や政策の軌道修正が必要な時期に差し掛かっていると考える。
幹事会報告	
今後の予定	見学を4月に変更できないか（見学開催間隔の平均化のため）検討したい。 3月　持田氏　リアル方式 4月　見学会 5月　山崎氏　リモート方式 6月　猪股氏　リアル方式 7月　西村氏　リモート方式 8月　宮本氏　リモート方式 9月　大谷氏　リモート方式 10月　見学会 11月　神田氏　リモート方式 12月　持田氏　リアル方式
次回日程	１．日時　2025年3月11（火）15時～17時 ２．課題　持田氏提供 ３．方式　かながわ県民センター704会議室
次々回日程	１．日時　　2025年4月９日（火）14時～16時 ２．見学先　ＪＡＸＡ相模原キャンパス